

## 和泉市池辺家蔵「相州新大仏一切経」の底本

佐々木 勇

(受理日二〇一八年十月四日)

### 〇、本稿の目的

鎌倉高德院の大仏は、国宝でありながら、造立に関する史料が限られている。その謎が研究者を引きつけ、研究が続けられて来た。<sup>①</sup>

鎌倉金銅大仏の完成時は不明であるものの、『吾妻鏡』建長四年(一二五二)八月十七日に「今日當彼岸第七日深澤里奉鑄始金銅八丈釋迦如来像」<sup>②</sup>とあることから、鑄造開始日は特定できる。

その二年前の建長二年(一二五〇)と翌三年の書写奥書を持つ「相州新大仏一切経」<sup>③</sup>が、この鎌倉金銅大仏に奉納された。

この「相州新大仏一切経」に関する記事も亦、古記録に見出せない。

しかし、田中塊堂『古寫經綜鑿』(一九四二年、鶴古郷舎)に、巻第四一四の奥書が記され、所在不明ながら他にも数百巻が存することが言われている。<sup>④</sup>

その後、「相州新大仏一切経」「大般若波羅蜜多経」の巻第四一四以外全五九九帖が、大阪府和泉市の池辺家に所蔵されていることが報告された。<sup>⑤</sup>

そして、近年、池辺家蔵原本の調査に基づき、書誌的研究および奥書一覧が公表された。<sup>⑥</sup>

さらに研究は進み、その底本は宋版一切経であることが指摘されるに及んでいる。<sup>⑦</sup>

先行研究が、「相州新大仏一切経」(以下、本資料とする)の底本を宋版一切経とする根拠は、次の三点である。

- ①内題・尾題下に千字文が写されていること。
- ②巻第十三奥書「二校了 四百八十二行」の行数が金澤文庫保管宋版の行

数と一致すること。

③宋版末尾に存する釈音が書写されていること。

右三点は、確かに宋版一切経の特徴である。

しかし、宋版一切経のすべてに共通する点ばかりではない。

本稿の目的は、鎌倉幕府の許可を得て建長二年に書写が開始された「相州新大仏一切経」の、底本を特定することである。

### 一、「相州新大仏一切経」の書誌と本稿対象巻および研究方法

#### 方法

#### 1. 本資料の書誌と本稿対象巻

書写奥書に「奉納 相州新大仏一切経也」と見られる本資料の現存経は、『大般若波羅蜜多経』(大般若経)のみである。『大般若波羅蜜多経』全六〇〇巻のうち、五九九帖は和泉市池辺家現蔵であり、巻第四一四の一帖は別の個人蔵である。<sup>⑧</sup>

本経の法量は、先行研究に詳しい。全帖が縦三〇cmを超える大型の粘葉装である。<sup>⑨</sup>

ただし、和泉市池辺家現蔵五九九帖のうち、次の諸巻は後の補写である。<sup>⑩</sup>

- 巻第九一―巻第一〇〇(鎌倉末期写)、巻第一六一―巻第一七〇・巻第一九一―巻第二〇〇・巻第五六一―巻第六〇〇(江戸期写)、巻第四四一―四四五(刊年未詳の版本)。

本稿の対象は、右八十帖および某氏蔵とされる巻第四一四以外の池辺家現存

本、全五一九帖とする。

## 2. 研究の方法

本稿の目的達成のためには、本資料を宋版一切経諸本と直接比較するのが、唯一最善の方法である。

幸いにして、所蔵者池辺家の閲覧許可が得られ、大阪府和泉市史編さん室の皆様にお世話頂き、「和泉市いずみの国歴史館」において、本資料の原本を閲覧することができた。

先行研究で紹介されるとおり、本資料は粘葉装であり、宋版諸本折本帖より、5cm程度巾が広い。

片面六行で書写する点は、東禪寺版以下の宋版諸本と等しいものの、装訂が異なる宋版の柱刻・刻工名・最終刻紙数などを本資料が写していることは、多くを期待できない。

よって、千字文・帖末釈音および経本文の比較を主として、本資料の底本となった宋版を特定する。

本資料書写奥書建長二年以前刊の宋版には、開寶藏・東禪寺版・開元寺版・思溪版・磧砂版が有る。

本資料とこれらとを比較するため、左の宋版『大般若波羅蜜多經』諸本を用いる。

開寶藏―『開寶遺珍』(二〇一〇年、文物出版社)、東禪寺版―東寺藏本・書陵部藏本、開元寺版―知恩院藏本・醍醐寺藏本・書陵部藏本、思溪版―

増上寺藏本・岩屋寺藏本、磧砂版―書陵部藏本・海の見える杜美術館藏本。右、宋版諸本の閲覧にも、所蔵者の皆様のご理解と多大なご協力を得た。

ここに明記して、御礼申し上げます。  
以下、対照結果を、諸項目に分けて記す。

## 二、本資料と宋版諸本との比較

### 1. 内題・尾題下千字文

本資料巻第一は、内題第一行に「大般若波羅蜜多經卷第一 天」と、千字文を写す。

宋版のうち開寶藏は、巻首を残す『大般若波羅蜜多經』遺物が無く、内題下

に千字文を彫ったものか否か、不明である。

しかし、山西省博物館蔵『大般若波羅蜜多經』卷第二百六および中国佛教協會図文館蔵『大般若波羅蜜多經』卷第五百八十一は、末尾を残すものの、尾題下に千字文は無い。

本資料巻第二百六は、尾題下に千字文「秋」を写す。

書写原本に無いものは写せない。よって、開寶藏は、本資料の底本ではない。東禪寺版・開元寺版・思溪版・磧砂版とも、『大般若波羅蜜多經』は、十帖を一函とし、全六〇函の各函に天々奈までの千字文が割り振られている。

ただし、その千字文を内題・尾題下に刻すか否かに、各版で巻ごとに小異がある。

巻第一―第十を取める第一函・天では、左のとおりである。

|        | 本資料  | 東禪寺版 | 開元寺版 | 思溪版 | 磧砂版  |
|--------|------|------|------|-----|------|
| 巻第一内題下 | 天    | 天    | 天    | 天   | (ナシ) |
| 尾題下    | (ナシ) | 天    | 天    | 天   | (ナシ) |
| 巻第二内題下 | 天    | 天    | 天    | 天   | 天    |
| 尾題下    | (ナシ) | 天    | 天    | 天   | (ナシ) |
| 巻第三内題下 | 天    | 天    | 天    | 天   | 天    |
| 尾題下    | 天    | 天    | 天    | 天   | (ナシ) |
| 巻第四内題下 | 天    | 天    | 天    | 天   | 天    |
| 尾題下    | 天    | 天    | 天    | 天   | (ナシ) |
| 巻第五内題下 | 天    | 天    | 天    | 天   | 天    |
| 尾題下    | 天    | 天    | 天    | 天   | (ナシ) |
| 巻第六内題下 | 天    | 天    | 天    | 天   | 天    |
| 尾題下    | 天    | 天    | 天    | 天   | (ナシ) |
| 巻第七内題下 | 天    | 天    | 天    | 天   | 天    |
| 尾題下    | 天    | 天    | 天    | 天   | (ナシ) |
| 巻第八内題下 | 天    | 天    | 天    | 天   | 天    |
| 尾題下    | 天    | 天    | 天    | 天   | (ナシ) |
| 巻第九内題下 | 天    | 天    | 天    | 天   | 天    |
| 尾題下    | 天    | 天    | 天    | 天   | (ナシ) |
| 巻第十内題下 | 天    | 天    | 天    | 天   | 天    |
| 尾題下    | 天    | 天    | 天    | 天   | (ナシ) |

移点底本に無いものは写しようがないため、積砂版は本資料の底本ではない。本資料は、底本の宋版に存した巻第一・巻第二尾題下千字文の書写を省略したものと考えられる。

## 2. 帖末積音

ここでは、積音について、本資料と東禪寺版・開元寺版・思溪版とを比較する。本資料の積音は、先行研究でも言われるとおり、帖末に書写されている。

しかし、東禪寺版・開元寺版は、積音を別帖として独立させる。東禪寺版および開元寺版の『大般若波羅蜜多經』も、十巻ごとに別一帖とし、全六十帖の積音帖としている。

一方、思溪版『大般若波羅蜜多經』の積音は、本資料同様、原則として各帖末に刻す。ただし、第一函（『大般若波羅蜜多經』巻第一―第十を収める天字函）と第一六〇函（同巻第一五一―巻第一六〇を収める張字函）は、当該函最終帖である巻第十と巻第一六〇の巻末に十巻分の積音をまとめて記す。

本資料の積音も各帖末に書写され、第一函と第一六〇函のみ、最終帖巻第十と巻第一六〇の巻末に十巻分の積音を記す。すなわち、思溪版と同じである。よって、本資料積音の底本は思溪版である、と考えられる。

とはいえ、別帖とされている東禪寺版・開元寺版の積音を、各巻末に書写した可能性も皆無ではない。

それを確認するため、積音の存否と積音本文とについて、本資料と思溪版・東禪寺版・開元寺版とを以下に比較する。

### ① 積音の存否

積音存否の対照結果例として、巻第二五一―二六〇までと巻第五五一―五六〇までとを示す。

|       |   |      |      |
|-------|---|------|------|
| (ナシ)  | は積音の記載が無いことを、(有)はそれが有ることを示し、「不出字」は当該巻に積音字が無いことを示す原本の注である。 |      |      |
| 本資料   | 思溪版   | 東禪寺版 | 開元寺版 |
| 巻第二五一 | (ナシ)  | (有)  | (有)  |
| 巻第二五二 | (ナシ)  | (有)  | (有)  |
| 巻第二五三 | (ナシ)  | (ナシ) | 不出字  |
| 巻第二五四 | (ナシ)  | (ナシ) | 不出字  |

|       |      |      |     |     |
|-------|------|------|-----|-----|
| 巻第二五五 | (ナシ) | (ナシ) | (有) | (有) |
| 巻第二五六 | (ナシ) | (ナシ) | (有) | (有) |
| 巻第二五七 | (ナシ) | (ナシ) | 不出字 | 不出字 |
| 巻第二五八 | (ナシ) | (ナシ) | 不出字 | 不出字 |
| 巻第二五九 | (ナシ) | (ナシ) | (有) | (有) |
| 巻第二六〇 | (ナシ) | (ナシ) | (有) | (有) |
| 巻第五五一 | (有)  | (有)  | (有) | (有) |
| 巻第五五二 | (有)  | (有)  | (有) | (有) |
| 巻第五五三 | (有)  | (有)  | (有) | (有) |
| 巻第五五四 | (有)  | (有)  | (有) | (有) |
| 巻第五五五 | (ナシ) | (ナシ) | (有) | (有) |
| 巻第五五六 | (有)  | (有)  | (有) | (有) |
| 巻第五五七 | (有)  | (有)  | (有) | (有) |
| 巻第五五八 | (有)  | (有)  | (有) | (有) |
| 巻第五五九 | (有)  | (有)  | (有) | (有) |
| 巻第五六〇 | (有)  | (有)  | (有) | (有) |

右のとおり、本資料と完全に一致するのは、思溪版のみである。この比較を全巻について行なった結果も、右と同然であった。

### ② 積音の本文

ここでも、紙幅の都合上、対照結果の一部を挙げるに留める。本資料・思溪版・東禪寺版・開元寺版のいずれにも積音が有る巻第五五一について、各本の積音本文を引用する。

(一)内は、割り注。／は、割り注内の改行。『は、本行の改行を示す。以下同。』  
本資料巻第五一 積音

俱胝(下珍遅反/千万数也)苾芻(上頰必步結二反下楚/俱反正作芻香草也)比出『家/人』猛犸(下獸/字)蝸(許謁反毒/蟲能蝨人)逼迫(上彼力反/下音伯) 魅(眉二反/鬼一反)恃(音市/倚) 唐捐(下音緣唐謂徒也/空也捐謂弃也) 要期(上音/邀) 毀篋(下莫/結反) 毀譬(下音紫阿/也亦作皆) 咄(下骨反/以言相謂) 柔粟(下軟/字) 味鈍(下徒困/反愚) 練若(下汝者反阿/此云寂靜處也) 掉擧(上徒吊反) 矯(居小反/一詐也) 嬾(乃鳥反弄也) 一音遶乱也) 冥坐(上

於見／反安也) 冢(寂／字) 煩惱(下亦／昨惚) 憤鬧(上俱妹反下／開字  
——心「中煩／悶也」 踰繕(上音餘下時扉反亦云由／句一——那此方四十  
里) 耽染(上／丁「貪反／也」) 敵對(上徒／的反) 刑戮(下音六辱也死  
／而後辱謂之) 無暇(下／音「夏閑／」) 覆蔽(上音副下／必祭反) 驚  
(暫字／同)

思溪版卷第五一積音

(右と全同)

東禪寺版卷第五一積音

俱胝(下珍遲反／千萬数也) 苾芻(上類必步結二反下楚／俱反正作芻香草  
也) 比出(「家／人」) 猛符(下獸／字) 蝸(許謁反毒／蟲能蝨人) 逼迫(上彼  
力反／下音伯) 魅(「眉二反／鬼一反」) 恃(音市／倚) 唐捐(下音緣  
唐謂徒也／空也捐謂弃也) 要期(上音／邀) 毀篋(下莫／結反) 毀誓(下  
音紫呵) 也亦作咎 咄(丁骨反／以言相「謂」) 柔爽(下軟／字)  
味鈍(下徒困／反愚) 練若(下汝者反阿) 此云寂「靜處」也 掉  
舉(上徒吊反) 矯(居小反／一詐也) 嬌(乃鳥反弄也) 一音遶亂也 冥坐(上  
於見／反安也) 冢(寂／字) 煩惱(下亦／昨惚) 憤鬧(上俱妹反下／開字  
——心「中煩／悶也」 踰繕(上音餘下時扉反亦云由／句一——那此方四十  
里) 耽染(上／丁「貪反／也」) 敵對(上徒／的反) 刑戮(下音六辱也死  
／而後辱謂之) 無暇(下／音「夏閑／」) 覆蔽(上音副下／必祭反) 驚  
(暫字／同)

開元寺版卷第五一積音

(ナシ) 魅(「眉二反」) (ナシ) 咄(「骨反以／言相調」) (ナシ) 味鈍(下  
徒／困反(ナシ)) (ナシ) 掉舉(上徒／吊反) 嬌(乃鳥反／弄也) (ナシ)  
(ナシ) 冢(寂／字) (ナシ) 憤鬧(上俱妹反／下開字(ナシ))  
右のとおり、本資料卷第五一の積音は、全十行に及ぶ。この十行の積音は、  
思溪版のそれと全く等しい。  
この巻第五一の本資料・思溪版積音は、東禪寺版ともほぼ等しい。  
しかし、「踰繕」の注「——那此方四十里」が異なる。  
これは、「踰繕那」を「此方四十里」とする東禪寺版の注文が正しく、本  
資料および思溪版の「此方四十里」では意味不通である。  
ここは、本資料底本思溪版の板面が欠損しており、「方」が「万」と摺り出  
されていたのであろう。本資料は、その思溪版本文を見えるままに書写した、

と考えるべき例である。

この例からも、本資料の底本が思溪版であることは明白である。<sup>(18)</sup>  
なお、開元寺版積音は、東禪寺版積音を抜粋している。抜粋の際の誤りも見  
られ、開元寺版積音は本資料積音の底本とはなり得ない。

### 3. 経本文

以上の検討で、本資料の底本が思溪版であることは、ほぼ確実となった。  
本節では、経本文について、本資料と思溪版および東禪寺版を比較する。

#### ① 本文の異同

ここでも、紙面の制約上、いくつかの巻の対照結果を掲げるに留める。  
(大きな字体の異同も含めて掲げる。最上段は、大正蔵の所在である。)

「巻第二」 本資料 思溪版 東禪寺版

大唐三蔵聖教序 先包 (同上) 先苞

0001a25: 或謂推 (同上) 或謂權

0002c23等: 暉映 (同上) 暉映

以上、本資料本文は、思溪版と全同であり、東禪寺版とは異なる箇所がある。

右以外に、東禪寺版は内題「大般若波羅蜜多經卷第一 天」に先立ち、「勅  
賜福州東禪寺覺禪寺天寧萬壽大藏」で始まる六面の刊記があり、本資料と思溪  
版にはこれが無い、という相違が存する。なお、本資料巻第一には、錯簡がある。  
全六〇〇巻の中間、巻第三〇一の経本文も、本資料は思溪版とのみ一致する。

「巻第三〇一」 本資料 思溪版 東禪寺版

0533c09: 不思维 (同上) 不思维

0534a11: 住捨性性 (同上) 住捨(性／性)

右の「住捨性性」は、東禪寺版は一字分に「性性」を小書き割書とする。

思溪版は、当該行を十八字として、本行に「性性」を入れる。本資料は、こ  
の思溪版に倣い、この行を十八字としている。<sup>(19)</sup>  
類例をもう一例のみ、巻第四十七から掲げる。

本資料巻第四十七

0265c26: 『現答曰如是如是誠如所言時舍利子問善現言

0265c27: 『若一切心無心性故不應取著者則色無色性故

0265c28: 『不應取著受想行識無受想行識性故亦不應

026529:『取著眼處無眼處性故不應取著耳鼻舌身』

本資料は、巻第四十七中ほどの大正蔵026528と次行を全十九字、次を十八字で書写する。思溪版もこれに等しい。

思溪版がなぜ右のように彫るのかは、基づいた東禪寺版を見ない限り不明である。

東禪寺版は、左の如くに彫る。

026526:『現答曰如是如是誠如所言時舍利子問善』

026527:『現言若一切心無心性故不應取著者則色』

026528:『無色性故不應取著受想行識(無受想行識)性故亦不應』

026529:『取著眼處無眼處性故不應取著耳鼻舌身』

東禪寺版は、026528の行末に「無受想行識」五字を入れるため、ここを小字割書にしている。

思溪版は、その五字を本行に組み込むため、三行を使った(三行を、十二字+二字+一字とし、五字を入れた)。

本資料は、この思溪版をそのままに書写した。

以上のごとく、本資料は、行取り・字詰を含めて、思溪版を正確に写している。

## ②欠筆

本資料は、底本思溪版で欠筆されている字を、欠筆としない場合が大部分である。

たとえば、巻第一巻頭「太宗文皇帝序」中の「妙道凝玄」の「玄」を思溪版は欠筆とするものの、本資料は欠筆していない。

しかし、思溪版の欠筆を引き継ぐ例も、わずかながら存する。  
左に、見出すことができた全例を掲げる(欠筆している漢字に<sup>(2)</sup>を引く)。

本資料 思溪版

卷第一一五(0825)23: 玄奘奉 (同上) 東禪寺版

卷第二九九(0519)05: 玄奘奉 (同上) 玄奘奉

卷第四五五(296a)18: 驚怖 (同上) 驚怖

右の欠筆例からも、本資料の底本が思溪版であることが確認される。

## 4. 刻工名

東禪寺版・開元寺版は、柱刻下に刻工名を刻すのが原則である。

思溪版は、この柱刻が紙継ぎで下に隠れ、紙を継いだ後は、刻工名も見えなくなる。ただし、内題・尾題下付近に彫られた刻工名が見える場合が希に有る。

左は、本資料がその希な刻工名を書写した例である。

|         |     |      |           |
|---------|-----|------|-----------|
| 本資料     | 思溪版 | 東禪寺版 | 開元寺版      |
| 卷第一四六巻頭 | 毛   | (同上) | 良 蔡       |
| 卷第五三九巻頭 | 海   | (同上) | (ナシ) (ナシ) |

## 5. 巻末紙数

巻末に記された紙数(当該巻に要する紙数)は、思溪版でも見える。この巻末紙数は、一紙六面の東禪寺版・開元寺版と一紙五面の思溪版とは、異なる。

そのため、本資料がこの巻末紙数を写していれば、底本の判断材料となる。しかし、宋版の巻末紙数は粘葉装である本資料の紙数とは一致しないため、本資料が宋版の巻末紙数を写す必要はない。

本資料中に書写された底本の巻末紙数は、左の一点のみであった。

|      |     |      |           |
|------|-----|------|-----------|
| 本資料  | 思溪版 | 東禪寺版 | 開元寺版      |
| 卷第四十 | 十三紙 | (同上) | (同上) 十三番尾 |

思溪版においても、一切経のはじめを飾る『大般若波羅蜜多經』は、巻第二百二十までは一紙六面である。

それゆえ、この巻第四十に写された巻末紙数のみでは、本資料の底本が思溪版である、との限定はできない。

## 三、思溪版を底本とした理由

本稿の検討によって、本資料「相州新大仏一切経」の『大般若波羅蜜多經』の底本は、宋版一切経のうち、思溪版であることが明らかになった。

では、本資料は、底本になぜ思溪版を選んだのであろうか。  
日本古写経・古版経の底本に思溪版が選ばれる理由について、本稿の筆者は、

考察したことがある。

その考察の結果、それは、随唐写経の流れを汲む日本古写経の本文に、思溪版の経本文が近かったためである、と考えられた。

そこで本節では、本稿における経本文比較の異同箇所について、本資料と思溪版のみに見られた共通点を、日本古写経と比較する（ただし、巻第一の「大般若經初會序」を日本古写経は写さないため、比較対象としない）。

各地に大量に伝存する『大般若波羅蜜多經』古写経のうち、本稿の筆者が原本閲覧の機会を得たまとまった写本の中から、平安時代写の興聖寺蔵本と、本資料と同時期写の左二本の本文とを、比較資料とする。

興聖寺蔵本—興聖寺蔵一切経のうちの写本<sup>28)</sup>

大東急記念文庫蔵本—建暦二年（一二二二）—貞応三年（一二二四）写本<sup>29)</sup>

根津美術館蔵本—寛喜元年（一二二九）—仁治三年（一二四二）八月、淨阿写本<sup>30)</sup>

〔巻第三〇一〕

063309: 本資料

063411: 不思维

住捨性

右の二箇所は、日本古写経三本とも、本資料・思溪版に一致し、東禪寺版とは異なる。

また、巻第四十七本文では、本資料と思溪版は、「無受想行識」の五字を挿入していた。日本古写経では、興聖寺蔵本・大東急記念文庫蔵本・根津美術館蔵本のいずれの写本にも、この「無受想行識」が存した。やはり、本資料と思溪版とが日本古写経本文に一致し、東禪寺版本文がそれと異なる。

この本文対照作業を全巻について行なえば、異例は存しつつも、同様の結果が多く得られる、と推測する<sup>31)</sup>。

#### 四、むすび

以上、「相州新大仏一切経」の底本となった宋版一切経の版種を特定することを本稿の目的として掲げ、いくつかの項目について検討した。

本稿の検討の結果、「相州新大仏一切経」の底本は、宋版一切経のうち、思溪版であることが明確となった<sup>32)</sup>。

本稿の筆者は、宋版一切経が日本に及ぼした影響を明らかにすべく、小論を発表してきた。その過程で、日本に与えた影響が最も大きい宋版一切経は、思

溪版であることが知られてきた。

今、本稿の検討によって、「相州新大仏一切経」の底本もまた、思溪版であることが判明した。

仏教諸学の研究に、思溪版を初めとする宋版テキストならびに日本伝存古写経・古版本が、今後より一層活用されることが期待される。

#### 【注】

- (1) 清水真澄「鎌倉大仏東国文化の謎」（一九七九年、有隣堂）、高橋秀栄「中の鎌倉大仏に関する歴史年表」（『鎌倉大仏史研究』1、一九九六年五月）、馬淵和雄「鎌倉大仏の中世史」（一九九八年、新人物往来社）、清水真澄「鎌倉大仏史研究（一）」（『成城文藝』一八八号、二〇〇四年九月）、塩澤寛樹「鎌倉大仏の謎」（二〇一〇年、吉川弘文館）。その他、塩澤寛樹「鎌倉大仏研究 著作・論文一覽」（『鎌倉大仏史研究』1、一九九六年五月）を参照。
- (2) 寛永刊本の本文に依る。
- (3) 注(5)三浦論文は、全巻書写には建長四年までかかったであろう、と推測している。
- (4) 田中塊堂『日本寫經綜鑿』（一九五三年、三明社）にも、同様の記述がある。
- (5) 赤松俊秀「新発見の相州新大仏一切経」（『日本歴史』一五五号、一九六一年五月）、三浦圭一「和泉市新発見の大般若波羅蜜多經について」（『史林』45（2）、一九六二年三月）、田中塊堂『日本古写経現存目録』（一九七三年、思文閣）等。
- (6) 納富常天「鎌倉新大仏の『大般若波羅蜜多經』について（含識語一覽）」（『鶴見大学紀要第4部人文・社会・自然科学篇』27・p.135、一九九〇年三月）。
- (7) 注(5)三浦論文、および高橋秀栄「鎌倉の大仏に奉納された一切経」（『印度學佛教學研究』56（2）、二〇〇八年三月）。
- (8) 田中塊堂『日本古写経現存目録』では、「某氏蔵」とされる。
- (9) 現存本は、経の上辺が1cm程度裁断されている。
- (10) 注(6)納富論文、参照。本稿の筆者も、原本調査によって、確認した。
- (11) この中、巻第五九一—巻第六〇〇には、思溪版の帖末釈音が写されている。
- (12) 佐々木勇「尊氏願経と宋版一切経思溪版」（『MUSEUM』第65号、二〇一五年一月）、同「足利尊氏願一切経の底本」（『かがみ』第46号、

二〇一六年三月)、参照。

(13) 現時点では、本稿で使用した写本・刊本の大部分が未公開である。しかし、東禪寺版・開元寺版混合の福州版および磧砂版の全頁画像が、「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧―書誌書影・全文影像データベース―」で公開された。

(14) 本資料巻第五百八十一は、江戸期の補写であるため、本稿の対象外である。

(15) 大藏会『大藏経―成立と変遷』(一九六四年、百華苑)以降の宋版一切経関連諸研究および『醍醐寺藏宋版一切経目録』(二〇一五年、汲古書院)、参照。

(16) ただし、本資料は、思溪版で一条のみの帖末積音の書写を省略する場合がある。左のものである。

思溪版巻第一三一「宴坐(上於見反)」、巻第二〇五「摩訶衍(下音ノ演)」、巻三四八「伺(相寺反候ノ也察也)」、巻第四一八「標(疋小反)。

これらには、底本の思溪版で鮮明に刷り出されていなかったものも含まれるであろう。現に、岩屋寺蔵思溪版では巻第二〇五の積音は、不鮮明である。

また、「不出字」の書写を略した巻(巻第五八・五九・二七五・一八五・一八六)も存する。

(17) この例からも、思溪版は、東禪寺版積音を踏まえて印刷されたことが知られる。

(18) 本資料が思溪版積音を引用していることが明確となる例を、左に加える。  
本資料巻第五三四積音

羸劣(上力ノ垂反) 鎧(苦改善愛二ノ反一甲也) 庾多(上於主反那ノ一ノ十億之數也)

思溪版巻第五三四積音  
(同右)

東禪寺版巻第五三四積音  
羸劣(上力ノ垂反) 鎧(苦改善愛二ノ反一甲也) 庾多(上於主反那ノ一ノ十億之數也)

開元寺版巻第五三四積音  
羸劣(上力垂ノ反) 鎧(苦改善愛ノ二反一甲) 庾多(上於主反ノ一ノ十億之數也)

右諸本積音の掲出語は全同であり、注の内容も同じである。  
しかし、改行位置・行取りが異なるため、東禪寺版・開元寺版の積音は二

行、思溪版は一行となる。本資料と等しいのは、思溪版である。

さらに、巻第四五の積音も、東禪寺版・開元寺版では二行のものを思溪版が一行に抄出し、本資料が思溪版のままを書写している。

その他、東禪寺版・開元寺版の五行の積音を開元寺版・本資料が四行にした巻第二二一も同様である。また、東禪寺版・開元寺版で一行の積音を思溪版が引用せず、本資料にも積音が無い巻が、全六十巻ほど存する。なお、巻第三二六では、思溪版全六行の積音のうち、本資料は四行目を誤脱している。

(19) この巻には、次の改行位置の異同も見られる。  
0535a27: 本資料 思溪版 東禪寺版

道相智一切相智(同上) 道相智一切相智(以下八行、改行位置が異なる)  
(右から九行は十六字(同上)(この九行も十七字)

東禪寺版は当該行を十字のみとし下七字分を残して改行し、次行以降も一行十七字で彫り続ける。

思溪版は改行せず、一行を十六字とする。思溪版は、この行以降十六字を九行続け、十行目から東禪寺版の改行位置と同じになる。本資料は、思溪版とまったく等しい。

その思溪版は、東禪寺版に基づきつつも、それを修正している。この0535a27「道相智一切相智」以降九行を十六字で書写する箇所は、本資料のみを見ていたのでは、突然の一行文字数変化の理由は、わからない。

一行の文字数について、一行十七字で書写を続ける中に、一行二十一字の行が見られる巻第九の左例を追加する。

0049b29: 「忿恚勤勇懈怠寂靜散亂智慧愚癡心故復次舍利子  
『有菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多時安住  
『布施淨戒安忍精進般若波羅蜜多嚴淨一

本資料は、右の(1)と(2)、大正藏0049b29に相当する一行を二十一字で写し、また行十七字に戻る。

この箇所の思溪版は、その基とした東禪寺版には存しない「智慧愚癡」の四字を「亂」と「心」の間に挟んでいる(大正藏の校異は、ここに「亂+(智慧愚癡)〈宋〉〈元〉」の注を付す。大正藏の〈宋〉は、増上寺蔵の思溪版である)。

本資料は、東禪寺版で十七字で彫られた行に四字を入れ込んだ思溪版本文を、そのまま一行二十一字で書写したものである。

(20) 行取り・字詰については、下の例も有る。巻第七九では、思溪版は第四

板第七板版面を一行十八字二十字で彫る。本資料も、この四板相当部分を思溪版の通りに写す。しかし、東禪寺版はこの部分も一行十七字で彫り続ける。そのため、思溪版第八板は、東禪寺版第七板の六面目から始まる。

(21) 日本の古写本・刊本で、中国皇帝名を欠筆とした例は、例外的である。佐々木勇「北宋版一切経開寶藏の欠筆とその伝播・受容について」(広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部) 62号、二〇一三年十二月、佐々木勇「親鸞の欠筆―親鸞が影響を受けた文献群―」(浄土真宗総合研究) 八号、二〇一四年三月、参照。

(22) この「玄」は、東禪寺版でも欠筆されている。  
(23) この外、東禪寺版でも欠筆である例に、左のものがある。

|                       |      |      |
|-----------------------|------|------|
| 本資料                   | 思溪版  | 東禪寺版 |
| 第一太宗文皇帝序              | 驚砂   | (同上) |
| 卷第一五六〇840c10          | 玄、裝奉 | (同上) |
| 卷第三五九〇849b27          | 恭敬供養 | (同上) |
| 卷第四四五〇296a08          | 驚怖   | (同上) |
| 卷第四六二〇336a13          | 供養恭敬 | (同上) |
| 卷第四六二〇336a22          | 供養恭敬 | (同上) |
| なお、本資料のみが欠筆としている例がある。 |      |      |
| 卷第一三〇0709c04          | 供養恭敬 | 供養恭敬 |

この欠筆が生じた理由として、次の二つが考えられる。  
1. 本資料筆者の判断で欠筆にした。  
2. 本資料の底本が前思溪版(早く彫られた思溪版)であり、前思溪版は欠筆されていた。

前思溪版の遺品が少ないため、当該帖前思溪版の原本調査ができていない。今後の課題としたい。

(24) 注(12) 佐々木論文、参照。

(25) 本資料は、粘葉装であるため、四面が一紙(一丁)である。本資料巻第四十は、全二十丁である。

(26) 思溪版は、『大般若波羅蜜多經』卷第二百二十一以降一紙五面とし、東禪寺版・開元寺版と紙数が異なる。佐々木勇「宋版一切経思溪版の版式転換―一紙六面から一紙五面へ―」(いとくら) 第10号、二〇一五年三月、参照。なお、先行研究が本資料の底本が宋版であるとした根拠の「②巻第十三奥書」二校

了 四百八十二行」の行数が金澤文庫保管宋版の行数と一致すること」からは、底本の宋版を特定できない。『大般若波羅蜜多經』卷第十三では、「金澤文庫保管宋版」(東禪寺版)と開元寺版・思溪版との行数は、同じである。

(27) 佐々木勇「春日版『五部大乘經』本文と底本選択理由」(日本古写経研究研究所研究紀要) 第2号、二〇一七年三月。

(28) 鎌倉時代の写本を交える。ここで比較する巻は、平安時代の写本である。

(29) 大東急記念文庫蔵「大般若經」(700番) 建暦二年・貞応三年写本。僚巻の巻第一全文影印が『東京大学国語研究室資料叢書』(15)古訓點資料集(一) (一九八六年、汲古書院)に収められ、巻第七十の画像が早稲田大学図書館「古典籍総合データベース」で公開されている。

(30) 『根津美術館蔵「春日若宮大般若經および厨子」調査報告書』、二〇一八年三月、参照。

(31) 卷第九は、逆の結果であった。本資料と思溪版は、0049a29c1「智慧愚癡」を入れていた。しかし、興聖寺藏本・大東急記念文庫藏本・根津美術館藏本とも、「智慧愚癡」の無い本文であった。

(32) なお、思溪版『大般若波羅蜜多經』には、東禪寺版・開元寺版に見られる題記は無く、本資料にも題記を写した帖は全く無い、という共通点もある。

(33) 注(12) (21) (26) (27) 佐々木論文、及び、佐々木勇「坂東本『教行信証』引用「日藏經」「月藏經」の依拠本について」(仏教史学研究) 57巻1号、二〇一四年十一月、同「春日版『五部大乘經』の底本とされた宋版一切経

(一)―刻記の比較による検討―」(広島大学大学院教育学研究科紀要) 第二部第64号、二〇一五年十二月、同「宋版の注文から作成された日本文献―高山寺藏喜海撰「新訳華嚴經音義」―」(国語と国文学) 第93巻5号、二〇一六年五月、同「鎌倉時代における「五部大乘經」構成経の転換に見られる宋版一切経の影響」(鎌倉遺文研究) 第38号、二〇一六年十月、同「春日版『五部大乘經』の底本とされた宋版一切経(一)―本文の比較による検討―」(広島大学大学院教育学研究科紀要) 第二部第65号、二〇一六年十二月、「春日版『五部大乘經』の底本とされた宋版一切経(二)―釋音の比較による検討と宋版との相違点―」(広島大学大学院教育学研究科紀要) 第二部第66号、二〇一七年十二月。

The Original Text of the 相州新大仏一切経  
(the Buddhist Canon Dedicated to the Kamakura Great Buddha)

Isamu Sasaki

Abstract : Sōsyū new Great Buddha's all the Buddhist sutras (相州新大仏一切経) were dedicated to the Kamakura Great Buddha.

They were written in 1250 and 1251.

The purpose of this paper is to clarify those original texts.

My research has led to a conclusion that those original texts were the Song-dynasty Sixi Edition of the Buddhist Canon (宋版一切経思溪版).

In this report, I found out the following things, too.

1. The Song-dynasty Kaiyuan temple Edition of the Buddhist Canon (宋版一切経開元寺版) modifies the Song-dynasty Tongchan temple Edition of the Buddhist Canon (宋版一切経東禪寺版).
2. The Song-dynasty Sixi Edition of the Buddhist Canon (宋版一切経思溪版) is based on the Song-dynasty Tongchan temple Edition of the Buddhist Canon (宋版一切経東禪寺版) not the Song-dynasty Kaiyuan temple Edition of the Buddhist Canon (宋版一切経開元寺版).
3. The glossaries (音釈) of the Song-dynasty Kaiyuan temple Edition of the Buddhist Canon (宋版一切経開元寺版) omits that of the Song-dynasty Tongchan temple Edition of the Buddhist Canon (宋版一切経東禪寺版).

Key words: Sōsyū new Great Buddha's all the Buddhist sutras, the Song-dynasty Sixi Edition of the Buddhist Canon, the Song-dynasty Tongchan temple Edition of the Buddhist Canon, the Song-dynasty Kaiyuan temple Edition of the Buddhist Canon

キーワード : 相州新大仏一切経, 宋版一切経思溪版, 宋版一切経東禪寺版, 宋版一切経開元寺版